

中国の経営者が稲盛イズムにはまるワケ

2014年9月29日
東洋経済オンライン
大城 昭仁

先日、40歳になった。いわゆる不惑だ。

”不惑”という言葉は、言わずと知れた、論語の「四十にして惑わず」から来ているが、ずっとこの言葉、おかしいのでは？ と思っていた。

だって、論語のその続きは、「五十にして天命を知る」だよ。天命を知る10年前に惑わない？ それって無理じゃない？ それに孔子自身、50代になって、国政に失望して旅に出ている。当人だって、惑っているじゃないか。

■ 「不惑」ではなく、正しくは「不惑」

そこで調べてみたところ、なんと「惑わず」と訳するのは間違いのようだ。

孔子の時代には、惑の字はまだ普及してなかったもので、正しくは「不惑」らしい。

惑の字は、土をつけると域、口で囲むと國となる。つまりは、「ボーダーライン」を意味する文字だ。だから、「不惑」は、「40歳になったら、あらゆるボーダーをとっばらって、もっとチャレンジしなさい」というのが本当の意味。

これなら納得できる。40歳よ、まだまだ落ち着くんじゃない！ もっともっとチャレンジしろ！ と2500年前の教えがお尻を叩いてくれる。中国の古典思想は本当に素晴らしい。

ところで、そんな素晴らしい古典思想を持つ国、中国で、今、大人気なのが稲盛和夫氏の経営哲学だ。

中国語に訳された著書は、累計350万部の大ベストセラーを記録している。日中関係悪化の折でも、特別コーナーが設けられている書店まである。6月に浙江省杭州市で行われた稲盛経営哲学報告会には約2000人の中国人経営者が集まった。登壇した経営者は稲盛イズムをどのように実践しているか、涙を流しながら紹介し、大きな盛り上がりを見せた。

今、なぜ、稲盛和夫氏の経営哲学がこんなにも中国人に人気なのだろうか？

「大会に集まった中国の経営者には、事業で成功して大きな財を成した方が多い。そんな経営者たちに、稲盛の『利他の心』という考え方は強く突き刺さるようだ」と言うのは、京セラ執行役員兼京セラ(中国)商貿總經理(社長)の後藤雄次氏。

中国では、近年の経済発展で多くの富裕な経営者が生まれた。彼らは、事業で得た富で、別荘を買い、高級車を買ひ、高級品を買ひ集め、世界旅行に出かけ、あらゆる贅沢を経験している。

しかし、どれだけ贅沢をしても、満足が得られない。幸せを感じない。そんな中、稲盛経営哲学に出会い、私利私欲を抑え、世のため人のために尽くす『利他の心』を知って実践することで、人生に喜びを感じるようになるのだと言う。

■ 中国で利他の心？

ただ、これは「わかれば信じたい」というのが日本人の感想だろう。

今夏、米食材卸大手の傘下にある上海福喜食品で、消費期限切れの食肉使用やずさんな管理発覚し、問題になった。御社は二セモノを売る店が平然と軒を並べ、路上では詐欺まがいの商品が売られている。食品偽造も日常茶飯事で、下水からくみ上げられた油が調理用として売られている。

まさに、儲かれれば何でもありの国。そんな国で「私利私欲を捨てる」？ 「利他の心」？

僕は、この現象に触れて、TEDでの、全米心理学協会元会長マーティン・セルグマン氏による、「何が人間を永続的に幸せにするのか？」というプレゼンを思い出した。幸せには、(1)快樂、(2)没頭、(3)意義という3つがある。(1)快樂は、レジャーやショッピング、スポーツなどによって、肉体的にあるいは感覚的に得られる幸せ。(2)没頭は、仕事や趣味、恋愛や研究に没頭して得られる幸せ。最後の(3)意義は、自分の長所を使って、何かに人生を捧げることによって得られる幸せ。

彼は、(1)快樂の幸せは、慣れが生じてしまうため、次々に、より強い快樂を必要とし、持続させることが難しい。幸せを持続させるためには、(2)没頭や(3)意義へとステップアップすることが必要と言っている。

中国の経営者の話を聞くと、まさにこれに当てはまる。中国人経営者が、最初、稲盛氏に興味を持つのは、「大富豪の経営者」「JALを立て直した人物」として、あるいは「アリババのジャック・マーが信奉している」ということからのようだ。きっかけの動機は「もっと儲ける方法を知りたい」というのが本音に思える。

儲けても儲けても、満たされない。だから、もっと儲ける方法を探す。そして「儲けるヒントを持っているかもしれない」人物、稲盛和夫氏に興味を持って本を手取る。イベントに参加する。しかし、そこに書かれているのは、儲け方ではなく、意義のある人生の創り方。そして、彼(彼女)は「自分が満たされなかったのは、儲けが足りないからではなく、没頭できることや、身を捧げるべき人生の意義を見いだしていなかったからだ」と気づく。

■ 単純化して中国をみるのは禁物

今の中国は、まだまだ「快樂の幸せ」を求める段階。しかし、一部の、それが満たされ始めた人々は、別の幸せを求め始めている。一定豊かになった人々の心に溜まった殻を取り除くカタルシスの作用。それが、この稲盛イズムの大人気を生んでいるのでは無いかと僕は思う。

そういえば、就職活動の「企業を見るポイント」では、最近になって「報酬」がベスト5から消えた。都会の若者の間では、「車は欲しくない」という人が増えている。ライフスタイルにこだわりが芽生え始めている。

食品の安全問題と稲盛人気は、正反対の価値観を象徴する現象だ。しかし、スピードの速さゆえに、その正反対の現象が同時に、しかも相当なインパクトで起こってくるのが中国だ。

物事を単純化して、ステレオタイプに見ていると見誤る。この国の中には、幾つもの国が同時に存在していると思った方がいい。この連載では、そんな中国で起きていることを、上海に駐在している私の目線で切り取り、読者の皆さんに届けていきたい。